

W5-4 合併肺病変を有する肺癌の治療 —肺気腫症及び肺線維症合併肺癌

東京医科大学外科第1講座

○中嶋 伸，高橋 充，日吉利光，坪井正博
奥仲哲弥，河手典彦，小中千守，加藤治文

【目的】合併肺病変として，肺気腫症及び肺線維症を有する原発性肺癌症例の治療について検討を加えた。【対象及び方法】肺気腫症及び肺線維症の診断は，主に画像所見に基づき行った。(1)肺気腫症合併肺癌：症例は52例，平均年齢69.2歳，組織型別内訳は腺癌17例，扁平上皮癌33例，その他4例(重複癌含む)であった。手術例は36例(全摘1例，葉切24例，区切3例，部切8例)であり，5例にVRS(laser)が同時に行われた。術前FEV1.0は根治術群，姑息術群，非手術群で，それぞれ1.76，0.95，0.88Lであった。術後合併症は閉塞性肺炎8例，気管支喘息2例で，術死及び在院死は4例であった。(2)肺線維症合併肺癌：症例は15例，平均年齢67.5歳，組織型別内訳は腺癌4例，扁平上皮癌10例，癌肉腫1例であった。手術は12例(全摘1例，葉切11例)に行われた。術前VCは手術群，非手術群で，それぞれ2.70，1.65Lであった。術後合併症としては，間質性肺炎の急性増悪が9例に認められた。術死及び在院死は4例であった。【結語】低肺機能を呈する症例が多く，術前のリハビリテーション・術後管理が重要である。

W5-6 肺癌と感染症の同時合併例の検討

佐世保市立総合病院内科¹、同外科²、
長崎大学第2内科³

○荒木 潤¹、泊 慎也¹、夫津木要二¹、浅井貞宏¹、
南 寛之²、中村 譲²、河野 茂³

【目的】肺癌と感染症の同時合併例12例について臨床的検討を加え報告する。【対象】肺癌と感染症の同時合併例は12症例で、活動性肺結核10例、非定型抗酸菌症(非抗酸症)1例、肺クリプトコッカス症(肺ク症)1例であった。肺結核の平均年齢は70.8歳で喫煙者が9例であった。非抗酸症は64歳、男性。肺ク症は75歳、男性。【結果】肺結核は発見が2週間以内の同時発見5例、結核が先に発見3例で肺癌の診断の遅れは、同一病巣のため、肺癌が画像上無いため、2箇所病巣があるも同一病変と考えたためであった。肺癌が先に発見は2例で、1例は培養に時間を要したため、1例は肺癌の治療拒否で退院のためであった。結核の部位は同一肺葉2例、同側他肺葉2例、他側肺6例。組織型は扁平上皮癌7例、腺癌2例、大細胞癌1例であった。治療は全例抗結核剤使用。肺癌は手術1例、放射線治療5例、化学療法を加えたもの1例、保存療法4例であった。2ヶ月以内の早期死亡が3例あった。非抗酸症は肺生検で組織学的診断と検鏡Gaffky2号で、腺癌は細胞診で診断された。手術所見では癌病巣を非定型抗酸菌病巣が取り巻いていた。肺ク症は肺癌の術後再発で同一病巣を経皮肺生検し、両者が病理組織学的に診断された。しかし浸潤影が多発。両者の区別困難で、肺ク症の治療するも肺癌で死亡した。【まとめ】肺癌と感染症の診断と治療は十分な配慮と注意が必要と考えられた。

W5-5 合併肺病変を有する肺癌症例の診断，治療上の問題点一切除肺組織の病理学的所見から見た検討—

国立療養所大牟田病院 呼吸器外科¹
久留米大学医学部外科学講座²

○堀内雅彦¹，小野博典¹，白水和雄²

【目的と方法】近年，肺癌は顕著な増加傾向にあり，従来より喫煙との関係が指摘されているが，もう1つの危険因子として合併肺病変との関係が重要な問題として挙げられる。また，合併肺病変を有する肺癌の診断，治療においても，種々の困難な問題点を含んでいる。今回，我々は当院の過去13年間の原発性肺癌症例648例において，合併肺病変の種類別に組織型別の肺癌との関係を検討するとともに，合併肺病変を有する肺癌症例の切除肺組織の病理学的所見から見た診断，治療上の問題点を検討した。【結果と結語】陳旧性肺結核と腺癌($P<0.01$)，肺気腫と大細胞癌($P<0.0001$)，じん肺と扁平上皮癌($P<0.05$)において各々有意差を認め，これらの既存肺病変は肺癌発生の高危険因子として認識する必要がある。肺結核では中高年齢で病期の進行したものが多く，予後不良で，陳旧性といえども病理学的には活動性を有すると考えられるものもあり，抗癌治療による結核の再燃，増悪が，間質性肺炎ではステロイド剤投与による術創傷治療遅延および周術期の増悪が，肺気腫(気腫性肺嚢胞症を含む)では比較的若年者で低分化，未分化癌が多く，予後不良で，低肺機能による手術適応の減少，嚢胞内細菌感染や真菌感染などの随伴陰影による診断の遅れなども臨床上問題となる。